

## ドン・キホーテ (十八)

セルバンテス (岡村 一訳)

## 第十六章

ドン・キホーテと、あるラ・マンチャの立派な紳士との出会い。

ドン・キホーテは先程の勝利により、われこそは武勇当代天下随一の遍歴の騎士なりと自惚れ、前述のようにご満悦、上機嫌、得意顔で旅を続けていた。先々出くわすはずの幾多の冒険をすでになし遂げ、そのどれにも大成功を収めた気分、魔法も魔法使いもなににするものぞといった鼻息である。騎士道実践の旅でさんざん棒で打たれた痛みも、石を投げられ齒の数を半分にされたつらさも、漕刑囚どもから恩を仇で返された悔しさも、不埒なヤングアスの馬方連中から袋叩きにされた屈辱も、すべてきれいさっぱり頭から吹き飛んでいた。あげくの果て彼は呟いた、このうえわがドウルシネア姫の魔法を解く術、手段方法さえみつければ、いにしえ誰より武運に恵まれた遍歴の騎士の手にした、手にし得た最高の栄光すら羨むまい、と。大将がこんな思いに陶然となつているさなか、サンチョが話しかけた。

「おめえ様よ、なんだかわからねえけど、おら、いまだにまだ友達のとめる・セシアルのやつ、あの化け物みてえな馬鹿でけえ鼻が目の前にちらついてしかたねえでがすよ」

「しからば、そちや、なにか？ ひよつとして《鏡の騎士》がカラスコ学士殿で、家来は友のとめる・セシアー

ルであつたと信じておるのか？」

「さあ、なんて答えればええか」と、サンチョ。「ひとつ言えるのは、あいつはおらの家や女房子のこと詳しく知つてた。ほかのやつではああはいかねえでねえかと。顔にしても、あの鼻をとつてみれば紛れもなく本人。村の壁一枚隔てた隣の家で、飽きるぐれえ見慣れた面だ。おまけに話し方もそっくりで」

「しからばサンチョ、尋ねよう。これへまいれ」と、ドン・キホーテ。「サンソーン・カラスコ学士殿が打ち物、物の具身に着けて、遍歴の騎士となつてわしと一戦交えにきたなぞ、どう考えれば納得できるんじや？ ひよつとしてわしやかのお人の敵であつたか？ なにかして恨みでも買うたか？ わしや張り合う相手か？ すなわちあちらも武人で、わしの得た武勇の誉れを羨まねばならんと申すか？」

それに対しサンチョは、

「だつたら、さあ、どう考えたらええべね、あの騎士様が誰にしろ、とにかくカラスコ学士様とは瓜二つ、家来はおらの友達のトメー・セシアルそっくりちゆうのは？ あれがおめえ様の言いなさるとおり魔法だとしたら、似た人間がもう二、三人世間にいてもおかしくねえべ」

ドン・キホーテは答えて、

「なにもかも見せかけだけのまやかし、わしをつけ狙う邪なる魔法使いどもの仕業なんじや。きやつらはわしが勝負に勝つと見越し、わしの倒す相手がわが友たる学士殿の顔となるよう仕組みおつたんじや、学士殿へいだく親しみに、剣を持つ腕の力が抜け、その刃が向かわぬようにとのう。つまりは、わが心に燃える正義の怒りをばやわらげんとの算段。かくして法螺やでたらめを言い立てわしを討たんとした者が、命拾ひしたという寸法じや。それが証拠に、ほれサンチョよ、身をもつて知つたではないか。あれを忘れぬ限り嘘偽りを言おうとて言えまい。魔法使いにとつて人の顔を変えるなぞ朝飯前。美しい顔を醜い顔へ、醜い顔を美しい顔へと自由自在なんじや。そちやその目で、三国一のドウルシネーア姫の匂い立つばかりの美しさをばありのまま、そのままの姿で見たはず。まだ二日と経たん。しかるにわしの目に映つたものといえ、土臭い百姓女のむさく醜い姿。目は濁つておつ

たし口も臭うておったぞ。されば、かような赦しがたき悪事をば働きおった邪なる魔法使いめが、なおそのうえあの主従をサンソーン・カラスコ学士殿やそちの友の姿に変え、わしの手から勝利の栄光を奪わんとしたところで、なんの不思議もあるまい。じゃが、どうあれわしや満足しておる、なにせいかなる姿であろうが、ともかく敵を打ち負かしたんじゃないやで」

「それはもう」と、サンチョは調子を合わせておいた。ドウルシネアが姿を変えられたといつても、もとより彼はそれが自分のごまかしだし取り繕いだと承知していた。だからあるじの妄想には引き摺られなかったものの、語るに落ちるはめになつてはまずいと、あえて逆らわなかったのだ。

こんなやりとりのさなか、同じ道をあとからきて追いついた者があつた。黒葦毛のたいそう立派な雌馬に乗つたその人物は、赤茶色のピロードの布で縁飾りした緑の上等の毛の外套を纏い、頭には同じ生地縁なし帽を被つていた。馬具は、鎧こそ短いが全体に遠出用のもの。色は同様に二色で、茄子紺に緑だった。イスラム風の偃月刀えんげつとうを吊るした幅広の剣帯は緑と金。足に履いた編み上げ靴はそれと揃い。拍車は金色の仕上げではなく緑色の脂やにが塗つてあつたが、そのつやつやと光る緑は服の色とよく合つていて、たとえ拍車が純金であつたとしてもこれだけ見栄えはしないだろうと思われた。旅人は二人に追いつき、丁寧に挨拶しながらも馬の歩みをいちだんと速め、さつと通り過ぎようとした。しかし、そのときドン・キホーテが呼び止めた。

「ああ、もし、ご立派な出で立ちのお方。ゆく方角と同じで、格別お急ぎでなくば、旅は道連れとまいりませぬかの？」

「実は素通りしかねたんですが」と、雌馬に跨るその人物は言った。「わたしの乗るこの雌といつしよになると、そちらのお馬がおとなしくしていないんじゃないかと氣になったもので」

「なに、ご心配にはおよばねえ」聞いて横からサンチョが返事をした。「安心して手綱を引きなさつてええだ、なにしろうちのお行儀のよきではびかいち、世界一評判のええ馬だで。こんなとき、はしたねえいたずらなんかしたことねえ。いっぺんだけ羽目外して変なちよつかい出しやがつて、そのときにはおらと旦那様が馬鹿高え利

子つきで返させられたげんど。ほんとに、もしよかったらお馬をゆつくり歩かせてかまわねえですがよ、こいつが据え膳だつて食わねえのは請け合うで」

馬を止めた旅人はあらためてドン・キホーテの容貌、風采を見てどきりとした。そのときドン・キホーテは兜を被つておらず、サンチョが預かつて鞆みたいにロバの鞍の前輪に掛けていた。その緑外套の旅人がドン・キホーテをまじまじ見る一方、大将のほうではそれに倍する熱心さで相手を観察し、人品卑しからぬ人物との印象を受けていた。年格好は五十がらみ。髪には白いものが僅かに混じっている。細く尖った感じの顔、快活ながら軽薄ではない人柄を物語る目。ひと言で言えばその旅人は身なりや雰囲気からして、ひとかどの人物と察せられた。かたや、こんな風貌や様子の人間は生まれて一度も見た覚えがない、というのがドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャを見ての緑外套の旅人の感想だった。まず、彼の痩せさらばえた馬に驚いた。それからひよろひよると背ばかり高いことや、げっそり頬のこけた青白い顔にも。また、大時代な鎧武者姿で厳めしくふんぞり返っている姿にも（そのあたりでは絶えて久しい図であり光景であつた）。ドン・キホーテは自分を注視する相手の視線を痛いほど感じ、その呆然とした表情の中になにを言いたいのか読みとつた。他人への氣遣いを忘れず、常に満足を与えようと心掛けている彼は、なにも訊かれない前に先まわりして言つた。

「ごらんのこの拙者がなりはまこと珍しきものにて、世間一般とはだいぶ違つておるやもしれませぬ。されば驚き召されたとて驚かず。されどひと言申しあげれば得心なさるでござろう。すなわち拙者、《冒険を求めてゆくと人の言う》遍歴の騎士のはしくれにてそうろう。田地田畑をば抵当<sup>かた</sup>に入れ、安樂なる暮らしを捨て故郷<sup>くに</sup>を出て、ままよ、いずこへなと連れてゆけと運に身を委ねたる身。いまや廃れ果てし遍歴の騎士道再興の志をば立て、爾來幾星霜、ときに躓き、ときに倒れ、ときに転落し、そうして立ちあがりながら、すでに八、九分どおり宿願を果たしてござる。すなわち夫を亡くせし婦人を助け、乙女を守り、人妻を庇い、みなし児、寄る辺なき童に手を差し伸べるなど、遍歴の騎士のなすべき仕事、本来の務めに励んでまいつた。かくして武勇とキリスト教の心もてあまた手柄挙げ、おかげで早くも伝記が書物となつて、すでに世界のほとんどの、大半の国で出まわつておる次第。これまで

三万部ほど出され、もしも天がなんとかしてくださらねば、しまいに千の三万倍も刷られてしまう勢いでござる。つまり手短に、いや、ひと言で申せば、なにを隠そう、われこそはドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ、またの名を（わびしき顔の騎士）と申す者なり。もとより《自慢話は自分汚し》なれど、万やむをえざる場合これあり。すなわち、傍らに拙者の値打ちを言うてくださる人なきときでござる。さればこ立派なる御仁よ、これなる馬にも、これなる槍にも、これなる盾にも家来にも、これなる物の具いっさいにも、わが悪しき顔色にも、骨と皮ばかりの体にも、もはやお驚き召さるまい、拙者が何者にて、いかなる道にあるかお知りなされたのでござれば」

ドン・キホーテはこれだけ言うた、あとは沈黙した。緑外套の旅人はなかなか口を開こうとしなかった。その様子からして、どう応じていいか困っているようだった。が、だいぶ経ってからこう言った。

「いや、表情からうまくこちらの気持ちを読み解けました。けれどお姿を拝見して感じた驚きは、お話を伺ったあとも相変わらず。というのは、自分が誰かを知れば驚きは収まるだろうとのお言葉でしたが、そうはなりませんでしたので。むしろ知ったぶん、もっと驚いて、愕然としているぐらいです。いったい今の世界に遍歴の騎士が存在するなんて、そんなことがあるものでしょうか？ しかも武勇伝の実録が本になって出ているなんて。夫を亡くした婦人に手を差し伸べるとか、乙女を庇護するとか、人妻の名誉を守るとか、孤児を救うとか、そんな人物がいまどきこの世の中にいるなんて、ちよつと納得し難いですなあ。そうだとおっしゃるご本人を現に目の前にしていなければ、一笑に付すところです。でも、実に結構な話だ。だつてお言葉によると、ご自身の騎士的偉業にかんする事実の記録が出版されているらしいですが、そんなものがあるなら、あの山ほど出てる架空の遍歴の騎士の物語なんか忘れ去られてしまふでしょうからな。昨今はあの手の本が世の中に氾濫し、少なからず公序良俗を乱している。おかげで良質の物語があたりを食い、埃を被っている状態ですからねえ」

「遍歴の騎士の伝記が虚構か否かについては、たやすく片づけられませぬ」と、ドン・キホーテ。

「じゃあ、あんなものが虚構ではないと言うお人があるか？」と緑外套の旅人が目をまるくすると、

「これにござる」と、ドン・キホーテ。「されどこの話はしばし措きましよう、もし道連れとなつてくだされば、

その間におそらく貴殿を納得させられましょうほどに。おのれが間違つておつた、あの数々の物語が事実にあらずと嘯くやつばらの尻馬に乗つてしようたど、さようお悟りなされるかと」

旅人はこの最後の言葉を聞いて、さすがに頭がおかしいのではないかと疑いだし、もう少し話させてみて確かめようと考えた。しかしほかの話題に移る前にドン・キホーテが、自分はこの誰でなにをしているか明かしたが、あなたはどのような人かお教え願えないかと言つたので、こう答えた。

「わたしですか、〈わびしき顔の騎士〉さん？ わたしはある村の地生えの郷士でしてな、これからそちらへご案内いたしますんで、よろしければ今日こいつしよにお食事でもいかがでしょう？ 名前はドン・ディエーゴ・デ・ミランダといい、並みより少しましな程度の財産持ち。妻子と友人に囲まれて暮らし、狩猟三昧、釣り三昧の毎日を送っていますよ。まあ、狩猟といっても鷹や猟犬を持つてゐるわけじゃなく、飼ひ馴らした山鶉<sup>うすずら</sup>か、あの気の強いフェレットを使つてのやつですがね。蔵書はスペイン語の本ラテン語の本合わせ七十冊ほど。物語あり信仰の書ありますが、騎士道物語にだけはまだ家の敷居を跨がせておりません。信仰関係の本よりそれ以外の手が伸びてしまう場合が多いですが、ただそれだつて健全な娯楽を提供しているものに限りません。つまり言葉で楽しませ、かつ着想で感心させ惹きつけるような。こんな作品はスペインには稀ですがね。

たまに隣近所の人達や友人らと食卓を囲みます、よくこちらが招く形で。わが家でもてなすときは品よくござつぱりやるよう心掛けていますが、食べ物や飲み物は充分お出しします。陰口は嫌いで、目の前でそれが出るのも許しません。他人の生活は詮索しませんし、他人の行動を見張るような真似もいたしません。ミサへは毎日出ます。貧しい者への施しはしますが、慈善はひけらかさないよう気をつけています、偽善や虚栄が心にはいり込むといけませんのでな。この敵どもときたら、知らぬ間にどんな謙虚な心も乗つとつてしまふ。仲違いの噂を聞けば仲裁を買つて出ます。聖母に深く帰依していますし、われらが主たる神の無限のお慈悲を片時も疑つたことはありません。自分がどんな暮らしをしているか、どんな楽しみを持つてゐるか、それを郷士が語るのにサンチョはいじつと耳を傾けていた。立派だ、聖人様だ、こんなふうに生きているお人なら奇跡だつて起こせるにちがいない、そう

感激した彼は口バから飛び降り、ばたばたと駆け寄って右側の鎧を掴むと、ありがたさに涙ぐみながら繰り返して接吻した。郷士はそれを見て言った。

「あんた、どうしたんだね？　なんで接吻なんか……」

「させといてくださいまし」と、サンチョ。「おらにはおめえ様が聖人様に見えるで。生まれて初めて見ただ、早駆け用の短え鎧の聖人様なんて」

「聖人なんて冗談じゃない」と、緑外套の郷士。「罪人つみびともいいところだよ。そっちこそそうなんじゃないかね、え？　その素朴さから見て善良そうだ」

サンチョは口バに乗り直した。彼の行動はめったに笑わないあるじを笑わせ、緑外套の郷士ドン・デイエゴには二度目の驚きを与えた。ドン・キホーテは郷士に子供は何人かと尋ね、そして、神を正しく認識していなかった古代の哲学者は、名家に生まれ、財産を持ち、大勢の友人に囲まれ、たくさんのおい子宝に恵まれることなどを至福として挙げているが、とつけ加えた。

「子供はですな、ドン・キホーテさん」と、郷士は答えた。「息子が一ひとりおりますが、あんなふうならたぶんいないほうがましだったでしょうな。いえ、なにも出来損ないというんじゃない、こっちの期待どおりじゃないという意味で。歳は十八になりましたでしょう。サラマンカに六年間やって大学でラテン語とギリシャ語を勉強させ、いざ上の課程に進ませようとしたはいいが、蓋をあけてみればこれがなんとすっかり詩学にのめり込んでしまっている始末で（あんなもの、〈学〉なんて言葉をつけて呼んでいいかどうかわかりませんがね）。こちらとしては法律の道に進んで欲しかったんですが、耳を貸しません。かといって学問の王たる神学も嫌ときた。できれば息子には一族の誇りになって欲しいのに。というのかわれわれの生きるこの時代、国は有用有益な学問であればおおいに奨励しています。なにしろ役に立たない学問など〈藁の中の真珠〉と同じですからな。ところが息子ときたら、ホメロスの『イーリアス』のこれこれの詩句がいいとか悪いとか、マルティアリスのこれこれの風刺詩は下卑しているとかいらないとか、ウエルギリウスのこれこれの詩句の解釈はこうだとかああだとか、朝から晩ま

でそんな詮索ばかり。とにかく口を開けば今言った詩人や、ホラティウスやペルシウスやユウエナリスやティブルスの作品の話です。そのわりにスペイン語の詩人にはたいして関心がない。ところがこうして日頃はスペイン語の詩なんて漢も引っかけない態度を示すくせ、今はサラマンカから知らせてきた四行詩をうまくとり込んだ詩を作ろうと、苦心惨憺しているんですから。どうやらあれは詩の競技会の題だったようで」

ここまで聞いてドン・キホーテが言った。

「お聴きなされよ。子と申すは親の分身でござつての。されば出来不出来にかかわらず、命の根源たるわが魂を愛おしむがごとく愛おしんでやるが親の務め。親たる者、幼きときより人の道や行儀を身に着けさせ、キリスト教徒としての正しき振舞いを教え、長ずるにおよんで老いたる父母の支え、わが子わが孫どもの誇りとなるよう育てあげるが役目でござる。されどこの学問せよとか、あの学問修めよとか強いるは当を得ておるかどうか……説得を試みるぐらいは悪しゅうござるまいが。もしも幸い食うに困らぬ家に生まれ合わせ、生活のため勉強せねばならぬ身でなくば、なにより好むと見える道に進ませるべしというが、憚りながら拙者の存念でござる。

なるほど詩学は実学にあらずして楽しみの学問なれど、さればとて知つておつて恥となることき類いのものでもござらぬ。郷士殿よ、愚考いたすに詩学とは年端のゆかぬ世にも美しき女童のごときもの。目下大勢の侍女が心を砕いて磨きあげ装わせ、飾り立てておる最中でござる。侍女とはすなわち他のさまざまなる学問にて、詩学はその奉仕をば受け、同時にその箔となります。されどこの女童は弄ばれたり、通りを連れまわされたり、広場の一角やら御殿の奥やらで晒し者にされるを嫌います。他方、詩とは摩訶不思議なる組成にて、あつかいを知る者の手にかかれれば計り知れぬ値の、それはそれは無垢なる金に変わります。詩人たらんとする者は詩の手綱をばしかと握り、愚かなる落首や魂なき歌の道を暴走いたすを防ぐべし。また英雄叙事詩、涙を誘う悲劇、技巧を駆使した陽気な喜劇ならばともかく、そのほかは決して金に換えるべきではござらぬ。加えて詩は不真面目なる輩や、それが内に蔵する宝が見えもわかりもせぬ無知蒙昧の有象無象の慰みものにされてもなりません。お断わりしておきますが、郷士殿、今は下々の身分卑しき者どもばかりを有象無象と呼んでおるのではござりませ



ぬぞ。たとえあるじと仰がれる人々、身分高き人々といえども、無知であれば皆その中に入れてかまいません、むしろ入れるが道理。以上申したことどもをば肝に銘じて詩に臨み、これを作れば、その名は世界中の開けたる国々にて知られ、もてはやされるでござろう。

ところで仰せでは、御曹司はスペイン語の詩をさほど重く見ておいででないとか。拙者に言わせればちと心得違いをしておいでじゃ。そのわけはでござる。かの大ホメロスはギリシャ人ゆえラテン語で書かなんだ。ウエルギリウスはローマ人ゆえギリシャ語で書かなんだ。要するに古代の詩人はいずれも、母の乳とともにわが血肉とした言葉で書いておった。崇高なる内容を表わさんと、わざわざ異国の言葉を使うたものではござらぬ。しからばどの国の人々も同様にするはあたりまえにて、ドイツの詩人がドイツ語で書くのと、スペインの詩人がスペイン語で書くのと、あるいはバスク語で書くバスクの詩人すら、これを一段下に置くいわれはあるまいかと。とは申せ、憚りながら拙者推察つかまつるに、御曹司はスペイン語の詩自体を疎んじなさるのではござるまい。スペイン語しかわからず、異国の言語ひいては異国の詩を知らぬゆえ、持つて生まれた才をば目覚めさせ、伸ばし、それを飾る術持たぬ詩人にござらぬのでござろう。たとえさようであれ、御曹司はやはり間違つておいでやもしれませぬ。なぜなら《詩人は生まれいずるもの》とは、まさしく至言でござれば。つまり天性の詩人は母親の胎内より生まれ出るときすでに詩人にして、知識、技巧に頼らずとも天賦の才にてよき詩をば作り、《われらが内に神在りて》云々なるいにしえの歌人の言葉を裏づけますゆえ。ただし、天性の詩人が技巧の助けを借りれば鬼に金棒、技巧の知識のみに頼る詩人を寄せつけず、その遙か上をゆくは必定とも申せます。そのわけは、技巧は才を超えねどこれをば助けるゆえ。よつて才と技巧、技巧と才がめでたく手を結べば、完璧このうえなき詩人誕生の運びと相なるでござろう。

要するに郷土殿、申したきはひとつ、どうか御曹司をおのれの星の導くまま歩ませておやりなされ。これまで学生の本分を尽くし、語学の習得という学業の第一の課程を見事お修めなされたのでござる。これよりはその知識を力におのが足にて歩み、人文学の頂点をお極めあそばしましょう。人文学は僧にも法曹にもならぬ人々が身に着ければ、まこと見場よき学問。されば司教の被るミトラや、法に精通せる法官の纏う法服同様、身の飾りと

も誉れとも箔ともなるものでござる。仮に御曹司が落首など作り他人の名に傷をおつけなされたら、そのときはご叱責なされ。罰を与え、書いた紙を破いておやりなされ。されど同じ落首でもホラティウス流、かの詩人があれほど見事なる詩句にていたしたごとく、人の悪徳そのものを槍玉に挙げなされたのであれば、褒めておあげなされ。と申すは詩を書いて、例えば嫉妬の情そのものに筆誅をば加え、妬む者一般を難じるは詩人の正當なる行ない。ほかの悪徳についても同じでござる、ある誰かに矛先を向けぬかぎり。ただし淫らなる詩はご法度。作ればポントスの島あたりに流されかねませぬぞ。詩人が行状淫らならざれば、作る詩も清きものとなるはず、ペンは心の口にて、心に生ずる思いはそのまま文字に生ましうでの。思慮深く徳高く謹厳にして稀有なる詩才持つ者をみいだせば、王侯は褒め称え榮譽を与え、果ては雷火もこれを避くという月桂樹の葉の冠を被せまする、かかる榮冠にて頭を飾る者をば何人も辱めるなかれと示すごとく」

緑外套の郷士はドン・キホーテの理路整然とした話しぶりに驚嘆し、狂人と判断したのは早計ではなかったかと思い返しはじめていた。このときサンチョはあるじの話がたいして面白くなかったものだから、途中で道を離れ、その近くで羊の乳搾りをしていた羊飼いらに、乳を少し分けてもらいにいつていた。

さて、ドン・キホーテの頭脳と爽やかな弁舌にすっかり感心した郷士が、さらに会話を続けようと口を開きかけたそのときである。ふと彼方を見やったドン・キホーテの目に、辿る道のゆくてから王室の旗を立て並べた馬車が一台近づいてくるのが映った。彼はこれなん新たな冒険と大声でサンチョを呼び、兜を持てと命じた。声を聞いたサンチョは羊飼いらに背を向け、口バを走りに走らせて主人の許へ急行した。身の毛もよだつ恐ろしい冒険がドン・キホーテを待ち受けていた。

伝記にいわく、ドン・キホーテが兜を持て叫んだとき、サンチョはチーズを買っている最中だった。絞らないままのぶよぶよのやつで、羊飼いが売り物にしたのだった。彼はあるじに早く早くと急かされ、その始末に困った。持っていこうにも器がなかった。そこで、金は払つてあるのに諦めるのはもつたいないと、あるじの兜を拝借することにした。彼がこの結構な買物を持って用を聞きに戻ると、ドン・キホーテは傍にくるのを待ちかねるようにして言った。

「よし、その兜を渡せ。わしになにも知らん素人なら別じゃが、あれに見えるはまさしく冒険に相違ない。わしに戦支度せよと告げるはず、いや、もう告げておるんじや」

それを聞いた緑外套の郷士は、きよろきよろあたりを見まわした。けれど目に映つたのは小旗を二、三本立てて近づいてくる荷車一台だけである。彼はその旗から、きつと国王陛下の金かねを運ぶ車だろうと見当をつけ、それをドン・キホーテに言った。しかし、わがゆくては冒険また冒険の連続と固く信じ、片時も疑わぬ騎士様は、てんで信用せず、こう返した。

「『備えあれば憂いなし』とやら。支度しておいて損はござらぬ。なにせ身をもつて悟つたところによれば、われに見える敵と見えざる敵あり。そやつらめがいつ、いかなるとき、いずこで、いかような姿にて襲いくるものやら知れませぬ」

彼はサンチョのほうを向いて、さあ、早く兜を、と催促した。チーズのぶよぶよの塊をとり出す暇のなかった

見事完遂されたライオンの冒険。ならびにその際ドン・キホーテの古今未曾有の勇気がいかなる極み、どれほどの極に達したか、達しえたかが語られる。

サンチヨは、やむなくそのまま手渡した。受けとったドン・キホーテは、中にそんなものはいっているとはつゆ知らず、すぐさま頭に被った。当然チーズは潰れてべちゃべちゃ、顔もヒゲも流れ落ちる汁ですっかりびちゃびちゃである。彼はびっくり仰天してサンチヨに言った。

「おい、なんじゃ、これは!? どうやら頭蓋骨がふやけたか、脳味噌が溶けたか、さもなくば頭のでっぺんから爪先まで汗みずくになってしもうたらしい。じゃがの、もし汗としても断じて冷や汗ではないぞ、目前に控えるは恐るべき冒険と重々承知してはおるが。なにか拭く物を持つておれば貸せ。こうしたらと汗が流れては目もあけておられんわい」

サンチヨは知らん顔して布切れを差し出した。そうしながら、あるじが勘違いしてくれてよかったと、ほっと胸を撫でおろしていた。ドン・キホーテは顔を拭いたあと、どうも頭がひんやりするようだがなんだろうと兜を脱いで見てみた。そして中に、あのどろどろの白いものがあるのをみつけた。彼はそれを鼻に近づけ、臭いを嗅ぐなり言った。

「わがドウルシネア・デル・トボソ姫のお命にかけ、こりゃ紛れもなくチーズじゃ。そちや、かようなもの、ようも兜に入れおったの、食わせ者めが、悪党めが、家来なるに不届き千万!」

そう言われてもサンチヨは慌てず騒がず何食わぬ顔で、

「チーズならこちにくだせえまし、ご馳走になるで。だけんどほんとに悪魔の口にぶち込んでやりなさるがええだ、あいつが入れやがったにきまつてるで。おめえ様の兜汚すなんて、なんでこのおらがそんなに、え、それ、真似するだね? それにしてもおらの仕業、たんに言うに事欠えて! ああ、そうか。今ぱつと閃いたんだけど、おめえ様と一心同体の家来だちゆうんで、これはきつとおらにも魔法使えの連中がとりついて、つけ狙ってやるでがすよ。それで、そのきたねえやつを兜に入れておめえ様の痾癩玉破裂させ、いつもみてえにおらの背中をどやしなさるよう仕向けやがっただべ。だけんど今度ばかりはほんとにおあいにくさまだ、おら、旦那様が賢いお方とちゃんと飲み込んで。きつと思つてくださつてにちげえねえ、おらはチーズとか乳とかそんな類

いのものはなんにも持つてねえ。たとえ持つてたところで兜に入れる前に腹の中に入れちまうだ」と「うむ、それもそうじゃ」と、ドン・キホーテは頷いた。

一部始終をじつと見詰める緑外套の郷士にとっては、びっくりすることばかりである。が次の瞬間には、本當に腰を抜かさんばかりになった。大將は頭と顔とヒゲを拭い、さらに兜を拭つて被ると、しつかり鎧を踏み直し、劍の具合を確かめ、槍を握り締めてこう言い放つたのだ。

「さあ、なんであらうとくるならこい。たとえ魔王みずから乗り出してまいろうが受けて立つ覚悟、これにでんとかまえて待つておるぞ」

そうこうするうち旗を立てたその荷車がやつてきた。人間は二人、それを引くラバの一頭に跨つた馬方と、荷車の前の部分に座る男だけだった。ドン・キホーテは前に立ちはだかつて言つた。

「貴殿ら、いずこへゆきなさる？ それなるはいかなる車でござるぞ？ なにを積んでおいでか？ して、その旗は？」

すると馬方が答えた。

「これはあたしの車で。獐猛なライオンを二頭、檻に入れて積んどります。オラーン要塞の司令官様が陛下にご献上なさるとかで、仰せつかつて都へ運んどる最中。旗は国のあるじであらせられる王様の旗でして、そのお品を載せとるちゆう印でございます」

「して大きゆうござるのかの、そのライオンどもは？」そうドン・キホーテが尋ねると、

「大きいなのつて」と、荷車の扉の前に腰掛けていたもうひとりが答えた。「アフリカからスペインへ渡つた中で、こいつら以上のはおるか同じぐらいのだつていやしません。あたしはライオン飼いで、ほかにも運んできましたが、これだけのちよつと覚えがない。つがいでして、この前の檻にはいつてるのが雄、後ろのが雌。今日はまだなにも食わせてないもんで、今腹を空かしています。ですからそこをどいてください。早く適当な場所に着いて餌をやらなにと」

それを聞いたドン・キホーテは薄笑いを浮かべて言った。

「なに、ライオンじゃと、このわしに？ このわしにライオンじゃと？ 今このときに？ よかろう。この場にライオンなんぞを差し向けてよこした御仁らに、このわしがさようなものに怯む男かどうかきつとわからせてしんせん。こりゃそのほう、降りい。ライオン飼いと申すならその檻をあけ、そやつどもを放て。これなる原の只中にて、ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャがいかにほどの者かとくと示し、ライオンなんぞを差し向けてまいった魔法使いどもに、ひと泡もふた泡も吹かせてくれようぞ」

「ははあん」と、その様子を見て郷士は内心呟いた。「騎士殿の正体見たり、か。こりゃああのチーズで頭蓋骨もふやけりや、脳味噌も腐ってしまったんだな」

このときサンチョが駆け寄ってきて泣きついた。

「旦那、お願えがす。ドン・キホーテ旦那様をとめてくだせえまし。こんなライオンを相手にするなんてんでもねえ。そんなむちゃされたら、みんなこの場で食い殺されちまうだ」

「じゃあ、あんたのご主人はそんなに頭がおかしいのかね？」と、郷士。「こんな猛獣にさえ向かっていく、そう思つてはらはらしなきやいかんほどのなかね？」

「頭がおかしいでねえ。無鉄砲なんです」と、サンチョは答えた。

「ならばその無鉄砲をとめよう」

言うところ郷士はドン・キホーテに近づいていった。そして、早く檻をあけるとライオン飼いに迫っている大将に、こう声を掛けた。

「どんなもんでしような。遍歴の騎士が立ち向かうべきは成功の見込みのある冒険で、まったく見込みなしなら手を出さんもんなんじゃないでしようかな。だつて勇気も度が過ぎて無謀の域にはいつてしまえば、それはもう強さというより狂気ですからな。ましてこのライオンはあなたと戦おうとこまできたんじゃない。そんな気なんてさらさらない。これは国王陛下への献上品なんだから、運搬をじゃましたり妨げたりするのはよくないでしょう」

「貴殿はのう、郷士殿よ」と、ドン・キホーテ。「屋敷へ歸つて、飼ひ慣らした山鶉うすや気の強いフェレットの相手でもしていなされ。他人への要らざる口出しはご無用に願いたい。これはわが務めでござる。このライオン殿らのお相手をつかまつるべきか否か、おのれでよう心得てござるわい」

言い捨てるとドン・キホーテはライオン飼いに向き直り、怒鳴りつけた。

「たわけ、なにをいたしておる！ 早う檻まじりをあけい。さもなくばこの槍で体を車に打ちつけてくれるぞ」

馬方はこの鎧兜の亡霊が眈まじりを決している様を見て言った。

「旦那さん、そんならせめてライオンを外へ出す前に、ラバを車から放させてください、こいつらを連れて危なくないところへ逃げますんで。ラバを殺やられたら一生路頭に迷わなきゃいかん。なんせ財産はこの荷車とラバだけなんですから」

「いやはや《縁なき衆生は度し難し》と、ドン・キホーテはかぶりを振った。「下馬してラバを荷車から放し、あとはどうなと勝手にせい。すぐに悟ろうがのう、骨折り損のくたびれ儲けであつたとのう」

馬方は大慌てで下馬してラバを放した。一方ライオン飼いは大声で言った。

「あたしは無理強いされ、しかたなしに檻をあけてライオンを出すんだ。この場のみなさん、証人になってください。それと、こいつらの与える害も損害も全部弁償していただく、それから、あたしが頂くはずの手間賃も引き受けていただく、そうご本人にはつきり断わつたつてことについても。さあ、さあ、檻をあけますよ。その前に避難しといてください、あたしには向かつてこないつてわかつてますが」

郷士が、そんな馬鹿な真似はよしなさい、いくらなんでもそれはむちゃだ、罰当たりだと重ねて制止したにもかかわらず、それでもドン・キホーテは余計なお世話と耳を貸さなかつた。なおも郷士は、よく考えたほうがいい、あなたはなにか勘違いしているとしたかと思えないと食い下がったが、大將は、

「ならば、のう、貴殿が悲劇に終わると思ひ召すこのひと幕、立ち会つておられぬとあらばその黒葦毛を走らせ、難を避けてておいでなされ」

サンチョはそれを聞くと涙目になり、そんな無鉄砲はおよしなせえまし、これに比べたら風車の冒険も、あの怖かった縮絨機の冒険も、とにかくこれまでの遍歴の旅でなし遂げたどんな冒険も、みんな子供の遊びみてえなものがすと訴えた。

「ええかね、おめえ様」と、彼は続けた。「今度ばかりは魔法も魔法もどきもねえ。柵のあいだ、檻の隙間から爪が見えたんだけど、あれは真正正銘ライオンでがす。あんな爪持ったやつだ。さぞかし山よりでつけえにちげえねえ。あれ見て、そう思うでがすよ」

「怖い怖いと震えておれば」と、ドン・キホーテ。「世界の半分よりもっと大きく見えたところで、なんら不思議はなからうて。こりや、そちや引つ込んでおれ。邪魔立ていたすでない。万一この場で討死したらば、言わずともわかつておろう、かねて申し含めておいたとおりじゃ。ドウルシネア姫の許へゆけ。あとはくどくは言わんが」

ドン・キホーテはさらにべらべら喋りつづけた。その様子からして、もうどうやつてもむちやを止められそうになかった。緑外套の郷士は体を張つてでもやめさせたかったが、武器武器の差を考えると、正気でない者相手に賢明な振舞いとは思えなかった。もはや彼にとってドン・キホーテは、どこからどう見ても狂人だった。郷士はドン・キホーテがライオン飼いに向かって、さつさと檻をあける、さもなくば、などとまたぞろやりだした時点で馬の腹を蹴った。サンチョはロバで逃げだした。馬方はラバを走らせた。こうして三人ともライオンが放される前に、なるだけ荷車から遠ざかろうとした。

サンチョは、これであるじは一卷の終わりだと悲しんで泣いた。ライオンの爪に掛かつてあの世いきと、今度こそ信じて疑わなかったのだ。サンチョは自分の運命を呪い、どうして二度目の奉公などする気になったのかと臍をかんだ。しかし泣いたり嘆いたりしながらも、少しでも荷車から離れたいとロバの尻を叩くのはやめなかった。さて、ライオン飼いは逃げる三人が充分遠ざかったのを見届けると、ドン・キホーテに、よしてください、やめてくださいともう一度前と同じように泣きついた。けれど、くどい、これ以上よせとかやめるとか言うな、どうせ無駄だ、いいから早く檻をあけると一蹴された。



ライオン飼いが前の檻を開きにかかっているあいだ、ドン・キホーテは馬上ではなく、下馬して勝負するほうがよくはないかと思案し、結局、ロシナンテがライオンを見て怖がつてはいけなないと、立つて戦う決心をした。そこで馬から飛び降りるとからりと槍を投げ捨て、盾に腕を通した。そうして剣を抜き放ち、一心に天佑を念じ、さらには愛しのドウルシネーア姫の加護を念じつつ、驚くべき勇氣、胆力を發揮して一歩、また一歩と進んで車の前に仁王立ちになった。

ここに至つてこの実録の著者が、次のような感嘆の声をあげているという事実は記しておくべきであろう。

「ああ、なんたるつわもの、ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ！ その勇氣、いかなる賞賛とて間に合わぬ！ 世の勇士がこぞつて倣うべき手本、いにしえスペイン騎士の栄光であり誉れであつたドン・マヌエル・デ・レオンの再来、まさに現代のドン・マヌエル・デ・レオン。いかなる言葉でこの驚嘆のほかない手柄を語ろう？ どう書けば後世の人々に信じてもらえよう？ たとえ大仰の極みであろうと、あなたに似合わぬ、あなたに過ぎた賛辞などあろうか？ あなたは馬にも乗らず、ただひとり、勇を鼓し、武名あげんと、剣、それも犬の刻印の業物わざものならぬひと振りのみを手に、盾、それも一点の曇りなき光り輝く鋼ならざるを腕に、かつてアフリカの密林が育んだ荒獅子中最強の二頭を待ち受け、待ち構える。ラ・マンチャの豪傑よ、あなたの武勇をありのまま語つて賛辞に代えよう。ここでは事実を述べるに留めよう。わたしの筆の力ではあなたを称えて称えきれぬものではない」

以上が前述した著者の感嘆の声であるが、このあと彼は切れた話の糸を継ぎ、以下のように続けている。

——ライオン飼いはドン・キホーテが「さあ、こい」と身構えたのを目にとると、ここで下手に逆らえば鬼の形相の豪傑騎士のご機嫌を間違ひなく損ねると判断し、前の檻の扉を大きく開いた。すでに述べたとおり、ここには雄がはいつていた。現われた姿を見ると途方もなく大きく、かつ恐ろしい凄顔のやつだった。扉が開くといきなりそのライオンは……寝そべつていた檻の中でごろんと寝返りを打ち、体を思い切り伸ばして伸びをした。それから口を大きくあけてのんびりゆつくりあくびしたあと、舌を二バルマほど出して目のあたりを拭い、

ついで顔中を舐めた。それが済むと今度は檻の外へ顔を出し、爛々と光る目であたりを睨めまわした。どんなに無鉄砲な者であろうと縮みあがってしまう眼光、面構えだった。

だがそこは他人とはひと味違うドン・キホーテである、ライオンを油断なく見つめ、さあ、早く檻から飛び出してかかってこい、と心の中で叫んでいた。きたらずたらずたにしてやるつもりだった。まさに古今未曾有の狂気ここに極まりである。ところがライオンのほうは大人で、少々生意気に出られたからといってかっこない穏やかな性格だったので、子供っぽい挑発や強がりには知らん顔。言ったようにあたりをひととおり窺うと、くりとまわってドン・キホーテに尻を向け、何事もなかったようにまたもとどおり檻の中で悠々と寝そべった。それを見たドン・キホーテはライオン飼いに、棒で叩いて怒らせて外へ出るようしむけろと命じた。

「そりゃあいけません」と、ライオン飼いは慌てた。「そんなむちゃしたら、真つ先にこっちが食い殺されてしまう。ね、おたく、もうこれぐらいでいいじゃありませんか。これ以上は考えられないってぐらい勇気を發揮なさった。なにももういっぺん運試しなんかしなかつた方がいいでしょう。扉はあいてるんだから出ようと思えば出られる。なのに今まで出てこないんだから、一日中待たつて出てきやしませんよ。おたくの肝っ玉の太さはもう充分証明されました。あたしの知るかぎりじゃ、勇ましい武芸者の務めは果たし状を叩きつけたあと、仕合の場で待ち受けるところまで。それでもし相手が現われなけりゃその人間は面目を失い、待つてたほうは勝ち名乗りをあげられるんだとか」

「なるほど、それもそうじゃのう」とドン・キホーテは頷いた。「では、そのほう、扉を閉めるがよい。今しがたのわしが振舞い、見たままををるだけ正確に証言してくれよ。要するにじゃ、そのほうは檻の戸をあけた、わしやライオンが出てくるのを待たがでてこなんだ。なおも待たがやはり出てこず、またものごとく寝そべりおつたと、かようにじゃ。わしや果たすべき努めをば果たし、魔法は打ち破られたんじゃ。道理、万歳！、真理、万歳！、まことの騎士道、万歳！ さあ、さつさと扉を閉めい。言うたではないか。わしやそのあいだに、逃げておらんようになった者どもに合図を送る。戻ってまいったら、此度こたびの手柄をおのれの口から話して聞かせるんじゃぞ」

ライオン飼いは檻を閉めにかかった。ドン・キホーテは櫓の先にチーズでべちゃべちゃになった顔を拭いた布を結んで掲げ、皆を呼びはじめた。三人は郷土をしんがりに、一団となつてうしろを振り向き振り向き必死で逃げていたが、やがてサンチョが白い布の合図に目を留めて言った。

「これは絶対間違えねえ。旦那様、あの猛獣どもをやつつけなされた。呼んでなさるで」

一同、手綱を引いて止まり、合図しているのはドン・キホーテと確認した。そこで、ひよつとしてもう大丈夫なのではないかと、ドン・キホーテの呼ぶ声がはつきり聞こえる地点までそろそろ引き返し、やがて安心して荷車の傍まで戻った。三人の顔を見てドン・キホーテが馬方に言った。

「さあ、ラバを繋ぎ直して旅を続けるがよい。それからサンチョよ、エスクード金貨をその者とライオン飼いに一枚ずつかわせ。引き止めてしもうたゆえ迷惑料じゃ」

「それはもうお安いご用で」と、サンチョ。「だけれどライオンはどうなつただね？ 死んだかね？ それとも生きてるかね？」

このときとばかりライオン飼いは武勇伝を語りだした、事細かに、気を持たせつつ、持てる話術の才を総動員し、ドン・キホーテの剛胆さを誇張しながら。いわく、騎士の勇姿を見るやライオンは怖じ気づき、檻の戸をあけっぱなしにしていたのに尻込みした。飛び出す勇気がなかったのだ。ドン・キホーテには怒らせてみると命じられたが、そこまでして強引に出てこさせるのはいくらなんでもやりすぎだと諫めて無理に我慢してもらい、戸を閉めさせてもらった――。

「どうじゃ、サンチョ？」と、ドン・キホーテは胸を張った。「いかなる魔法といえどまことの勇氣にはかなうまい？ なるほど魔法使いどもはわしから運は奪えよう。されど勇氣や覇氣ばかりはどうにもできまいて」

サンチョは金を渡した。馬方はラバを繋いだ。ライオン飼いはドン・キホーテの手に接吻して受けた氣遣いに感謝するとともに、都へ着いたら王様の御前にあがつて今日の勇ましい手柄話をお語り申しあげると約束した。

「万」その折り王様より何者の手柄なるぞとこのご下問あらば、〈ライオンの騎士〉とお答え申すがよい。これまで

の「わびしき顔の騎士」という名は捨て、今日からはさよう名乗る。さよう名を変え改める。これは古来の習わし。遍歴の騎士は気持ちに応じ、時に応じて名をつけ直しておった」

やがて荷車は去っていき、ドン・キホーテ、サンチョ、緑外套の郷士の三人もふたび目的地へ向かつて進みだした。

この間<sup>かん</sup>ずつと緑外套の郷士ドン・ディエーゴ・デ・ミランダは、ひと言も口をきかなかった。そしてドン・キホーテから目を離さず、言動を注意深く観察していた。彼にはドン・キホーテが狂気の混じる正気の人とも、正気の混じる狂気の人ともとれた。ドン・ディエーゴは、ドン・キホーテ伝の前編が本になっているのをまだ知らなかった。もしもそれを読んでいたれば、どんな妄想にとりつかれているか承知していたらうから、言動にいちいち驚きはしなかったろう。ところがそうではなかったので、品のある立派な言葉遣いで理路整然と話すのを聞いて正気と思ったり、非常識で無謀で馬鹿な行動に走るのを見て気が違っていると驚いたりしたのだった。彼はひとりごちた。

「こんな呆れた話があるか？ チーズの詰まった兜を被って、魔法使いの術で頭がふやけたなんて思い込んだ。無理やりライオンと戦おうとするなんていうのも、無謀極まりない。信じられん狂気の沙汰だ」

こんな感想をぶつぶつ呟いていた郷士は、ドン・キホーテに話しかけられはつとわれに返った。

「ドン・ディエーゴ・デ・ミランダ殿よ、さぞや後先見ずの猪武者と呆れておいででござろうの？ それもまたいたしかたなし。拙者の所行を見ればほかに考えようがござらぬでの。されば、お気持ちは察すれどなにとぞご承知おき願いたいのだが、拙者、さほど無鉄砲でも無分別でもござらぬ、さだめて手がつけれぬと思ひ召したであろうが。なるほど凛々しい騎士が国王の御前、大広場の真中にて、見事猛牛を槍でひと突きするは絵になる姿。賑々しく催されておる馬上槍試合にて、ご婦人方の見守る中、騎士が甲冑や打ち物輝かせ勝負に臨む姿は華やか。いくさ稽古あるいはこれに類する行事にて、おのれの仕える朝廷を楽しませ喜ばせ、さらには、かく申してよくば、その華となる騎士の姿はいずれも輝いて見えます。されどそのいずれにもまして燦然と光放つは

遍歴の騎士にて。遍歴の騎士は荒野を、無人の地を、四つ辻を、森を、山を經巡りまする、生きるか死ぬかの冒險求め、これをばめでたく首尾よくなし遂げんと、永劫朽ちぬ榮えある名を打ち立てんとのみ願いつつ。都にて宮仕えの騎士が乙女に言い寄る姿より、いずこかの打ち捨てられた村にて夫をなくした婦人をば救う遍歴の騎士の姿のほう、それはもう美しゆうござる。

騎士は皆それぞれ役割がござる。宮仕えの騎士は婦人に仕えるべし。揃いの衣服着て朝廷の威光をば示すべし。わが家の食卓に馳走並べ、貧しき騎士をば養うべし。馬上槍試合を差配し、模擬戦をば司るべし。威儀を正し鷹揚で一分の隙もなき振舞いたすべし。そうしてとりわけキリスト教徒として申し分なき言動を心掛けるべし。かくすれば果たすべき努めをば果たす結果となるでござろう。かたや遍歴の騎士は諸国の秘境をば進んで巡るべし。複雑怪奇なる迷路に足を踏み入れるべし。人力のおよばぬ難事に挑むを常とすべし。人住まぬ荒野にて夏の盛りは炎天に耐え、冬は身を切る寒風、身の凍る氷雪に耐えるべし。獅子を恐れるなかれ、怪物に怯むなかれ、魑魅魍魎に臆するなかれ、なんとなれば、かようなものどもをば探し求めて一戦交え、ことごとく退治するこそ遍歴の騎士たる者が第一の、そうしてまことの務めなれば。

されば、遍歴の騎士の列に連なる巡り合わせとなつた拙者、わが務めの内なりと存ずるものは、なにによらずいたさぬわけにまいりませぬ。すなわち、ただいまのごとくこれなるライオンどもに挑むはまさしくわが務めにて。もつとも、それが度の過ぎた蛮勇とは承知してござつた、勇氣のなんたるかはよう心得ておりまするゆえ。それは臆病と無謀、これら両端の悪しき性さがの間にある武徳。されど勇氣が足りず臆病者に墮そうより、勇氣余つて猪武者となつてしまふがましかと。なにせ吝嗇より浪費癖のほうがよい意味での氣前のよきに変わりやすいと同じく、臆病者がまことの勇氣身につけるより猪武者が眞の勇者となるほうがたやすうござるでう。しかば冒險に挑むにおいても、お疑いあるなドン・ディエーゴ殿、カード遊びと同じ、《札を引いて負けよ、引かず負けるな》でござる。これこれの騎士は猪突猛進じやの猪武者じやのと噂されるほうが、卑怯の臆病のと噂されるより聞こえもようござるによつて」

「いやドン・キホーテさん」と、ドン・ディエーゴ。「お話を伺うにつけ、お振舞いを拝見するにつけ、どういう頭脳をお持ちか察せられます。よしんば遍歴の騎士道の法や掟が忘れ去られようと、専用の書庫や保管庫みたいにお胸の中にちゃんとしまわれているんで安心ですな。さ、急ぎませんか。遅くなつてしまいます。早く村へまいりましょう。屋敷でゆつくり骨休めなさってください。さきほどのご活躍でさぞやお疲れでしょう。お体のほうはそれほどでないにせよ、緊張はなさったでしょうし、心の疲れは体に出やすかろうと思えますんで」

「ドン・ディエーゴ殿、そのお氣遣い、まことかたじけのう存じまする」と、ドン・キホーテは礼を言った。

三人はそれまでより道を急ぎ、午後の二時頃だったろう、やがてドン・ディエーゴが村に構える屋敷に着いた。ドン・キホーテは彼に〈緑外套の騎士〉という呼び名をつけていた。

## 第十八章

〈緑外套の騎士〉の“城”すなわち屋敷でドン・キホーテがどう過ごしたか。さらに本筋とあまり関係ない話なども。

ドン・キホーテの目に映ったドン・ディエーゴ・デ・ミランダ邸は、いかにも田舎の屋敷らしくただっ広かった。だがそれでも表門の上には、あまり上等ではないにせよ家紋を彫った石が掲げてあった。中庭には酒の貯蔵所、玄關脇には食料を保管する穴蔵があり、周囲には甕がずらりと並んでいた。ドン・キホーテは甕がトボーソ産と気づくと、魔法で姿を変えられてしまった愛しのドウルシネア姫の記憶が蘇り、言葉が口を衝いて出るまま、どんな相手に向かって喋っているかなどかまわず、溜め息をつきつきこう語りかけた。

「ああ、いとおしき者どもよ、出会い悲しわが心。／かつて汝ら愛らしく、いと陽気なる乙女にて。

ああ、トボーソの甕どもよ、汝らを見てわが愛しの姫のこのうえなく苦く甘き思い出がこの胸に蘇つたるぞ！」

これは母親といっしよにドン・ディエーゴを迎えに出ていた息子、あの学生詩人に聞こえた。彼は母親ともども、ドン・キホーテの異様な姿を見てぎよつとした。ドン・キホーテはロシナンテから降りると、とてもうやうやしい態度で母親の前へいき、手を求めて接吻した。ドン・ディエーゴが彼女に言った。

「さあ、いつもみたいににこやかにドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャさんをお迎えしなさい。おまえの前においでのお方だよ。知勇兼備、天下無双の遍歴の騎士殿なんだ」

ドン・クリスティーナという名のその婦人は、溢れんばかりの好意を示しつつ、いたって丁寧にドン・キホーテを迎えた。これに対しドン・キホーテも非常に折り目正しい立派な言葉遣いで、なにかお役に立てることがあればどうかご遠慮なく、と返した。大学生の息子ともほぼ同じ調子で挨拶が交わされた。ドン・キホーテは彼の言葉を聞いて、教養のある頭のよい青年と感じた。

ここで伝記の著者はドン・ディエーゴ邸の様子を詳しく描写している。それを読むと、田舎で農業を営む裕福な人物の屋敷がどんなふうかがわかる。だが訳者は伝記の本旨にそぐわないという理由で、こうした細部のあれこれは省くほうがよいと判断した。この伝記の価値は真実の物語という点であり、本筋から逸脱した無味乾燥な記述ではないからだ。

ドン・キホーテは通された一室でサンチョに鎧を外させ、膝丈のズボンとセーム革の胴着姿になった。どちらも鎧の油污れが移っていて穢かった。つけた襟は折り返しただけの形の、糊づけせずレース飾りもない学生風のものであった。足の乗馬靴は茶色で、重ねて蠟引きの短靴を履いた。ご自慢の剣は、アザラシ革の剣帯で右肩から斜めに吊って身に帯びた。というのも、どうやら長年腎臓に問題を抱えていたらしいのだ。一番上には毛のマント、褐色の上等の生地をやつを羽織った。ただ彼はこうしてなりを整える前に、水を釣瓶五杯ないし六杯分使って頭と顔を洗った（実際に何杯だったかについては、完全な意見の一致がない）。しかしそれでも水は最後まで白く濁った。サンチョがにわかに食い気を起こしてつまらぬチーズなどを買い、結果、あるじを真っ白けにしてしまったせいだった。ドン・キホーテは今述べたようなよいき姿になると、大学生の息子が食事の支度が

できるまでのあいだ相手をしようと待つ部屋へ、しゃなりしゃなり、格好をつけて歩いていった。他方ドニャ・クリステイーナはこれほどの賓客を迎え、主婦として屋敷を訪れた人々を上手にもてなすだけの才覚も力量もあることを示そうと張り切っていた。

ドン・ディエーゴの息子は名をドン・ロレンソといった。彼はドン・キホーテが着替えを済ますのを待つあいだ、今のうちにと父親に言った。

「父さん、屋敷へお連れになったあの方ですが、どう考えればいいんでしょうねえ。あんな名前を名乗って、あんな格好して、自分は遍歴の騎士だなんて言って……僕も母さんも目を白黒させてますよ」

「うーん、なあ」と、ドン・ディエーゴは首を傾げた。「振舞いを見てれば世の中に二人としないような狂人だ。ところが話す内容は立派で、その印象を覆し否定してしまう。言えるのはこれだけだ。直に話してみても、どんな具合か自分で確かめてみなさい。おまえは頭がいいんだから、あの人が賢いのかとんでもないのか、一番納得のいく答えを出してみるといいよ。まあ正直言って、わたし自身は正気じゃなく気が違ってるほうに賭けるがね」

こうして話したあと、前述のとおりドン・ロレンソはドン・キホーテの相手をしにいったのだった。二人でいろいろな話をしたが、その中でドン・キホーテはドン・ロレンソにこう語りかけた。

「貴殿は稀有の才能と明敏なる頭脳をお持ちじゃそうな。お父上のドン・ディエーゴ・デ・ミランダ殿より伺っておりますぞ。とりわけ詩人としては、上に〈大〉がつくほどじゃとか」

「詩人は詩人かも知れませんが」と、ドン・ロレンソ。「でも大詩人だなんてまさか。なるほど詩を作るのは嫌じゃありませんし、いい詩人の作品を読んだりするのだって、まあ好きです。けれど大詩人だなんて……父がどう申したか知りませんが」

「その謙虚さ、悪くはごさうめぞ」と、ドン・キホーテ。「詩人などという輩は誰も彼も唯我独尊、われこそは天下一なりと自惚れておりまするのう」

「例外的ない法則はない、です」と、ドン・ロレンソ。「それに大詩人なのに、自分ではそう思っていない人だつて



いるんじゃないでしょうか」

「数えるほどでござろうのう」と、ドン・キホーテ。「ところでひとつお尋ねいたすが、ただいま作っておいでのは詩は、いかようなものでありましょうや？ 父上のお話では、いささか頭を悩ませ苦吟しておいでとか。展開詩の類いであれば、拙者、多少心得がござるゆえ、お聞かせ願ひとう存ずる。それから、もし懸賞に応募なさるのであれば、二等賞を目指しなされ。一等賞は依怙か身分で与えられると決まっております。純粹に審査のみにて選ばれるは二等賞。さすれば三等賞は実は二等賞という理屈となり、いきおい一等賞は三等賞に落ちましよう。大學卒業時の席次と似てござる。されどかような実情にもかかわらず、一等賞というのは世間では大した箔となりまするが」

（これまでのところ、あなたが狂人だという判断は下せない。じゃあ次にいつてみましょうか）と、ドン・ロレンソは心の中で呟いた。そしてドン・キホーテに、

「学校を出ておいでのようですが、どんな学問をお修めになったんですか？」と尋ねると、

「遍歴の騎士道学でござる。これは詩学に劣らぬすばらしき学問。むしろちと優るやもしれませぬ」という答えが返ってきた。

「どんな学問でしょう、それは？ これまで聞いた覚えがありませんが」と重ねて尋ねるとドン・キホーテは、

「この世のありとあらゆる、少なくとも大半の学問をば内に含む学問でござる。と申すは遍歴の騎士の道を歩む者はまず法学者であり、各人に固有のもの、ふさわしきものをば与えるため、人の権利、物の権利定めた法に通じておらねばなりません。それから神学にも精通し、おのれの信ずるキリスト教の教えをば、いついかなるときであれ求められれば明快かつ的確に説けねばなりません。医学、とりわけ本草学の知識も不可欠でござる。これは無人の荒野の只中にて、傷を治す効能ある草を見分けるため。なにせ遍歴の騎士は傷を負うたび、それを治してくれる者を探しまわるわけにはまいりませぬでう。天文学も学んでおかねば。星を見て夜間における時の経過、あるいは世界のいかなる土地、いかなる風土におけるかをば知らんがためでござる。数学にも長けておらねば。」

なにつけ入り用となりましようゆえ。信仰、希望、愛の対神徳と、賢明、正義、剛毅、節制の枢要徳、いずれも身に着けるべきは言うにおよばぬとして、枝葉にわたつて申し述べれば、魚のニコラスもしくはニコラーオと異名をとつた男をめぐる言い伝え、それにひけをとらぬほど水練の達人でなくば、馬に蹄鉄も打て、鞍や轡くつわも直せねば。根幹に立ち戻つて申せば、神と愛しの姫に真心捧げねば。心に節操を持ち、言葉に品を保ち、鷹揚に振舞い、ことをなすにあつては勇ましく、苦難に耐え、貧しき者に慈悲深く、そうしてなによりたといへ一命を失うとも真実を守り抜かんとする気概がなくば。れつきとした遍歴の騎士は、かような根幹も枝葉も残らず備えてござる。以上縷々申し述べたは、ドン・ロレンソ殿よ、遍歴の騎士道を学び実践する騎士の身に着ける学問が、洩垂れ小僧の手習いのごときものか否か、学校、大学にて授けられるうちもつとも高尚なる学問に匹敵せぬかどうか、それをばおわかりいただかんがためでござる」

「もしおっしゃるとおりだとすると、確かにそれはすべての上に立つ学問でしょう」そうドン・ロレンソが言う

と、

『もし』とはこれいかに？」と、ドン・キホーテは聞き咎めた。

「つまり」と、ドン・ロレンソ。「遍歴の騎士で、それだけのものを身に着けた人間がいたためしがあるのか、今現在いるのか疑問だということです」

「これまでたびたび言うてまいったことじゃが、今一度これにて繰り返さずばなりますまい」と、ドン・キホーテ。「世間一般は、遍歴の騎士などこの世にいらなだと思つております。拙者に言わせれば天の奇跡でも起こり人々が真実に目覚めぬかぎり、昔も実在し今も実在するといかに口を酸っぱくして説こうが所詮無駄骨。拙者、幾度もさような目に遭つてまいった。さればここでまた時を使い、おおかたと同じ誤りに陥つておいでの貴殿を説き伏せるつもりはござらぬ。ただ天に祈らんと存するのみでござる、貴殿を迷妄より救い給えと。過ぎし世遍歴の騎士がいかに世のため人のため役立つか、いかに世を求められたか、当世もおるがあたりまえの世なればいかばかり役立つか、それをばわからせ給えと。されど今は末世、人々の墮落甚だしく怠惰、無為、大食、

安逸の世となり果ててござる」

(ついに出了な) 聞いてドン・ロレンソは心中呟いた。(だけどそうはいっても興味深い狂気だ。これがもしただの狂気にしか見えなけりや、僕はとんだぼんくらつてことだ)

ここで話は打ち切りとなった。食事に呼びにきたからだ。ドン・ディエーゴが息子に客のおつむの具合をどう判断したか尋ねると、こう答えた。

「世界中の医者を集めたつてあの狂気を治すのは不可能。あの頭の中にあるごちゃごちゃの原稿は、腕のいい筆耕を総動員しても清書できつこないでしょう。いわば正気の混じる狂気というところですかね、まともなときも少なくないんだから」

皆で食事の用意のしてある部屋へ移動した。屋敷にくる前に道連れになったときドン・ディエーゴは、招いた客にはこざつぱりした、しかしおいしい料理をたつぷり出すようにしていると云っていたが、言葉に嘘はなかった。だがドン・キホーテにとってなにより好ましかったのは、屋敷中がカルトゥジア会の修道院的な驚嘆すべき静謐に包まれていることだった。やがて食卓が片づけられ、神への感謝が済み、手も洗い終わると、ドン・キホーテはドン・ロレンソに向かつて、詩の競技会に出す予定の作品をぜひ聞かせて欲しいとせがんだ。それに対しドン・ロレンソは、自作の詩の披露を頼まれると断わる、そのくせ頼まれもしないのに吐き散らす、そんな連中といつしよにされたくないので、と前置きしたうえで言った。

「ではお聞かせしますが、これでなにか賞がとれるとは自惚れていません。あくまで習作として作つたにすぎませんから、そのおつもりで」

「拙者の友で、なかなかに見識ある人物がござつての」と、ドン・キホーテ。「その者によれば、わざわざ苦労して展開詩など作るものではないと。わけをこう申しておりましたぞ。第一に逆立ちしても原詩にはおよばぬ。第二に原詩が意図し伝えんとする内容から、しばしば、いや、たいてい逸れてしまう。第三に規則があまりに窮屈。疑問文もいかぬ、『言えり』『言わん』の類いの挿入もいかぬ、動詞を名詞に用いるもいかぬ、言葉の意味を変え

るもまかりならぬ等々、作る者を縛る制約や制限が山ほどあると。貴殿には言わでもでござろうが」

「実を言うと、ドン・キホーテさん」と、ドン・ロレンソ。「さっきから揚げ足をとろうと手ぐすね引いてるんですが、まるで隙がない。鰻みたいに手のあいだをすり抜けておしまいになります」

「はて？」と、ドン・キホーテ。「その、すり抜ける、とはなんのことかの？ いかなる意味でござろうや？」

「それはまたあとで」と、ドン・ロレンソ。「とりあえず原詩と展開詩をお聴きになってみてください。こんなやつです」

昔が今に戻るなら

なにを望もう、これ以上。

いっそ今すぐやってこい、

待つべきものよ、未来にて。

### 展開詩

すべては過ぎ、

幸せの日々も過ぎて――。

かつて〈運命〉が惜しまず与えた幸せ、

もう二度とは戻りこぬ、

ほんの僅かさえ。

〈運命〉よ、もうどれほど

おまえの足許にひざまずいているか。

もう一度微笑んでくれ。

どんなに幸福だろう、

昔が今に戻るなら。

なにも要らぬ、歓喜も栄光も

栄誉も栄冠も、勝利も成功も。

ただひとつ、あの楽しい日々

戻ることを除いては。

(思い出すたび心は疼く)

もしも願いが叶えば

(運命)よ、

激しく身を焼く炎は鎮まろう。

まして即座に叶うなら

なにを望もう、これ以上。

だがどうせ手の届かぬ望み、

ひとたび過ぎた時が

帰ってくるなど。

この世の誰にも

奇跡を起こせはしない。

時は駆け、時は飛翔し

瞬く間に去つて歸らぬ。

虚しい願い、

「時よ、早く過ぎゆけ」、そして

「いつそ今すぐやっつてい」

知らぬ者などない、

期待と不安の狭間で足掻くは

生きながらの死だと。

遙かに樂なのに、死んで

苦しみを逃れられたら。

では身のためだろう、死は——違う。

深く心を探れば

将来への不安、それは

胸をとぎめかす。ああ、

「待つべきものよ、未来にて」

ドン・ロレンソが詩を披露しおえるやドン・キホーテは立ちあがり、彼の右手を掴んで高くあげ、ついでに声の調子もあげて叫ぶに近い感じで言った。

「御曹司よ、天地神明に誓うて天下に並びなき大詩人なり！ まこと桂冠を授けられてしかるべし。それも今は亡きさる詩人がおのれで言うたごとくキプロスの、あるいはガエタの学士院なんぞではのうて、仮に今なおあるとせばアテネの学士院、あるいは今日あるバリやボローニャやサラマンカの学士院よりでござる！ お作を一等

賞に選ばぬ審査員あらば、フォイボスに射殺されてしまうがよい。向後ムーサらが彼らの家の敷居を跨ぐことな  
かれ。ところで十一音節詩のお作もござりまするかの？ もし御意に沿わば、ちとお聞かせくださらぬか、貴殿  
の驚嘆すべき才をば余さず知りとうござれば」

なんとも傑作ではなからうか。ドン・ロレンソはドン・キホーテを狂人と思っているくせ、おだてられてご機  
嫌になったとか。おお世辞よ、おまえの力のなんと強大か！ 心地よいおまえの支配の、どれほど遠く広くおよ  
んでいることか！ ドン・ロレンソはこの事実を裏づけた、なぜならドン・キホーテの頼みを聞き入れ、言われ  
たとおりピュラモスとティスベの話、二人の恋物語を題材にした次のソネットを披露したからだ。

### ソネット

勇者ピュラモスの心射止めた麗しき乙女、  
恋を隔てる塀を穿<sup>うが</sup>つ。

クピドは急ぐ、キプロスを発つて、  
僅かにあいた奇跡の穴を見ようと。

穴の中で聞こえるは静寂、  
狭さに怖じけ、声は身を入れぬ。

されど心は飛び込む。  
げに為し難きを為すは愛の常。

あげく情熱はほとばしり、

やがて愚かな乙女は死を選ぶ。  
なんという悲劇！

二人はともに死に、ともに葬られ、ともに蘇った、

一振りの剣、一基の墓、ひとつの伝承に。

ああ、奇しき結末！

「あつぱれ、名吟なり！」ドン・キホーテは、ドン・ロレンソのソネットを聞いて膝を打った。「才なき詩人の掃いて捨てるほどおる中に、本物の詩人たる貴殿をばみいでしたさぞ、御曹司。何うたソネットの出来映えを見れば、さよう思わずにおられませぬ」

ドン・キホーテは四日のあいだ、ドン・ディエーゴ邸で愉快極まりない時を過ごした。四日目の終わり、彼はドン・ディエーゴにこう言つて暇乞いした——当家で受けた歓待や手厚いもてなしはありがたかつた。しかし遍歴の騎士たる者がいつまでも安逸に身を委ね、便々と日を暮らすのはよくない。ゆえにそろそろ務めを果たすべく、冒険を求めて出立しようと思う。聞けば当地は冒険に満ち満ちてゐるとか。冒険に挑んで無聊を慰めつつ、本来の目的地サラゴースで開催される予定の馬上槍試合の日のくるのを待ちたい。まず手はじめにモンテシーノスの洞窟にはいつてみるつもりだ。このあたり一帯では、それについて実に驚嘆すべき話がさまざま語られている。ついでに一般にレイデーラ湖と呼ばれている七つの湖の水源、真の源を探り、つきとめたい——。ドン・ディエーゴ親子は口を揃えてドン・キホーテの面目躍如たる決意を持ちあげ、屋敷からでも農園からでもなんでも好きに持つていつて欲しい、自分達は誠心誠意援助させてもらうつもりだ、あなたの高潔な人柄や遍歴の騎士という誉れ高い立場を考えれば当然だ、と言つた。

やがて旅立ちの朝がきた。ドン・キホーテには心躍る朝でも、サンチョ・パンサにとっては暗雲垂れ込める憂



鬱な朝だ。ドン・ディエゴ邸ではたつぷり飲み食いでき、とてもご機嫌な毎日だった。それにひきかえ野山や無人の土地を巡っているときは、のべつひもじさに泣いた。すかさずかの道中袋の頼りなさが不安だった。またぞろあれに戻るのはまっぴらごめんだ。だが鬱々としながらもサンチョは、これだけは絶対必要と思うものを道中袋に詰め込めるだけ詰め込んだ。

いよいよ出発というとき、ドン・キホーテはドン・ロレンソに言った。

「以前申しあげましたやら。申しあげておれば繰り返しになり恐縮でござるが、もしも名声の殿堂、あの近づきがたき高みへ至る近道やら早道やらをみつけたくば、いと易きこと。詩を捨て遍歴の騎士の道を歩みなされ。この道は、それはそれでさほど楽ならざる詩の道の、さらに百倍も険しゅうござるがの。されど遍歴の騎士の道を辿れば、瞬く間に皇帝の座へ駆けあがるも夢ではござらぬ」

これで大将は自分が狂人だと完全に証明した。続く言葉はさらにその駄目押しとなった。こう宣<sup>のたま</sup>つたのだ。

「ほんに拙者、なろうことならドン・ロレンソ殿をお連れ申し、服従いたす者をばいかに赦し、身の程知らずのやつばらをばいかに打ち負かし懲らしめるか、それをばお教えいたしたきものでござる、いずれも拙者の信奉いたす道に不可欠なる行ないゆえ。されどいかんせん、まだお若い。また詩もあつぱれなるご修行ぶりじゃ。これもまた捨てがく思し召そう。されば、ひとつだけご助言申すに留めておきます。詩人として名をなさんと思わば、他人の評価に耳を傾けなされ。ひとりよがり禁物でござるぞ。なにせわが子を醗<sup>か</sup>しと思ふ親はおらぬものじゃが、わが才より生まれた子についてはこの親馬鹿がますます高じまするでう」

見識<sup>けんし</sup>だったり妄想<sup>むさう</sup>だったり——父と子はドン・キホーテのまだら模様の話にあらためて驚いた。また冒険への挑戦を念願とし悲願として、冒険探し、その実災難探しでしかないものに一意邁進せねばならぬという考えにとりつかれ執着している様にも。お役に立てるときはどうぞ遠慮なく、といった類いの儀礼的な言葉が繰り返された。そうして“城主の奥方”から出立の快諾を得たのち、ドン・キホーテとサンチョはそれぞれロシナンテとロバに跨り、屋敷をあとにしたのだった。